

独立行政法人国立病院機構 附属看護(助産)学校

令和8年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：令和8年2月17日(火) 9:00~9:50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記3つの記入欄がある。その説明を読み、3項目の全てに記入する。
 - ・ 受験校欄 受験校を記入する。
 - ・ 受験番号欄 受験番号を記入する。
 - ・ 氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を左詰めで記入する。

— 開始後 —

1. 問題は2ページから16ページまでの各ページに印刷されており、第1問~第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄への記入によって行う。たとえば、

1

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の〈例〉のように解答欄に2と記入する。

〈例〉

	問1				
	1	2	3	4	5
解答	2				

3. 訂正は、消しゴムできれいに消し、解答用紙に消しくずを残さないこと。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退室はできない。

受験番号				

※左詰めで記入する

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

言語を語る上で重要な観点の一つめは、発信の目的が、コミュニケーションに特化しているという性質である。＊ホケットはこれを「特定性」と呼んだ。言うまでもなく、音声言語であれ手話であれ、私たちの発話は相手に意図を伝えることを目的としている。

たとえば、「ネコが好きなんです」という発話は、聞き手に自分の好みを教える。「ネコー」という一語のみからなる発話であっても、特別な文脈がなければ、話し手（とおそらくは聞き手）の見えるところにネコがいることが聞き手に伝えられる。独り言や日記はこれに(A)がイトウしないように思えるが、いずれも自分を相手とした（甲）なコミュニケーションという側面があると考えられる。

このことは、これらの発話をA口笛や咳払いせは払いと比べるとより実感できる。口笛も咳払いも音声言語と同様、口から発せられ、聴覚で知覚される。ところが、いずれも多くの場合は、誰かが聞くことが想定されておらず、コミュニケーションが意図されていない。この点で、口笛や咳払いは非言語的である。

もちろん、スポーツ選手の離れ技に対して感動を示すために口笛を鳴らしたり、他人の無作法を指摘するために咳払いをしたりというような場面は存在する。それらの口笛や咳払いは、より言語的と言ってもよいかもしれない。(a)、いずれにしても、つねにコミュニケーションに用いられる発話と比べると、口笛や咳払いは言語性が低いと言えよう。

では、Bオノマトペはどうだろうか。「雷がピカッと光った」「床がツルツルしているね」「黄身がトロツとしておいしい」という例では、それぞれ光り方、床の見た目や滑りやすさ、黄身の食感という情報を聞き手・読み手に伝える。「ドーンーン」という一語発話も、爆発の様子を聞き手と共有し共感してもらったためのものである。(b)、コミュニケーションの相手に情報を伝達するという目的は、オノマトペと他のことばではとくに違わない。むしろ、書きことばよりも会話や育児場面でオノマトペが多く使われることを思うと、オノマトペはとくにコミュニケーション性の高いことばと言えるかもしれない。《1》

コミュニケーションを目的とするというのは、多くの言語のオノマトペが共有する特徴である。以下は南米のケチュア語話者の発話あきた（秋田訳）で、アメリカ人研究者に、巨大なアナコンダ（南アメリカの熱帯雨林に生息する蛇）が池の中でバクを捕まえたエピソードを話して聴かせている。

トウプリー……バクがどこへ向かおうと、そろそろアナコンダは水から出てくるよ、ほら！

冒頭の「トウプリー」がオノマトペである。上がり調子で発音されたこのことばは、アナコンダが水に飛び込む際の（乙）音と様子を写している。「トウプリー」のあとには4秒もの間が置かれ、聞き手は水中に(i)ヒソむアナコンダがいつ出てくるだろうと、緊張感と恐怖感を抱かずにはいられない。このようにオノマトペは、聞き手を場面に引き込むという積極的なコミュニケーション機能を持っている。《2》

ホケットが挙げた次なる言語の大原則は「意味性」である。意味性とは、特定の音形が特定の意味に結びつくという性質である。「イヌ」という日本語の名詞は〈イヌ〉という概念に結びつく。dog という英語の形容詞は〈柔らかい〉という属性概念と結びつく。

ここでも口笛や咳払いと比べてみよう。いずれも口から発せられる音ではあるが、非常に限られた状況以外では特定の概念と結びつくわけではない。《3》口笛や咳払いと違って、オノマトペは日本語コミュニケーションの中で特定の意味と明確に結びついている。単に音を発しているわけではない。「ワンワン」というオノマトペはイヌの鳴き声と結びつき、「フンワリ」というオノマトペは雲や綿のような柔らかさと結びつく。このように、意味性を持つという点でも、オノマトペは言語なのである。

言語は目の前の物事だけでなく、その場にはないものや過去・未来の出来事も話題にすることができる。つまり、言語はモノや事柄がイマ・ココに存在するか否かに縛られず、時空を超えて物事を語る事が可能である。たとえば、話し手も聞き手も日本にいる場合でも、「ロンドンってスタイリッシュで素敵な街だよ」と言うことができる。「昨日はたくさん雪が降りましたね」という発話は過去の出来事を話題にしている。まだ存在していない建物について、「もうすぐここにマンションが建つらしいですよ」と言うのも、ごく自然な発話である。この特徴をホケットは、「超越性」と呼んだ。

イヌの鳴き声を考えてみてほしい。あなたの飼い犬は、その場所に不審者がいることをあなたに伝えようとして激しく鳴いている。30分前や1時間後ではなく、別の場所でもなく、今、ここに不審者がいることをイヌが感知しているのである。この意味で、イヌの鳴き声はコミュニケーションの媒体ではありえなくても、超越性を持っているとは言えない。

口笛で感心を表明したり、咳払いで無礼を指摘したりするのも、イマ・ココでしか機能しない。昨日のスポーツ観戦を思い出して口笛を吹くのはおかしいし、静かな図書館で5分前に電話をかけていた利用者に咳払いをしても、何の効果もないだろう。

オノマトペはどうだろうか。オノマトペは明らかにイマ・ココに縛られない。「昨日、うちのイヌがワンワン吠えちゃって困ったよ」と過去の鳴き声を写したり、「入学式の頃には学校の桜もヒラヒラと舞っているだろうね」と未来の桜の花びらの様子を写したりすることができ、「今頃オーストラリアでは太陽がキラキラ輝いているだろうね」と、遠い国の光を写すことも可能である。《4》

イマ・ココを超えた超越性を持つことは、ホケットの挙げた言語の特徴の中でも最重要なものの一つである。オノマトペはこの最重要の(ウ)キジ|ユンを立派にクリアしているのである。《5》

言語とは学ぶものである。子どもは生まれながらに、ことばを理解し使えるわけではない。親や周りの大人と日々やりとりを行い、彼らが話す母語に触れることで、単語や単語の組み合わせ方を知る。たとえば、イヌは日本語であれば「イヌ」、英語であればdog と呼ばれることを学ばなくてはならない。このことをホケットは「伝統的伝達」ないし「文化的伝達」と呼んだ。特定の伝統・文化の中で教えられ習得されるという意味であるため、「継承性」と呼ぶことにする。

口笛はどうだろうか？ 歌と同様に、口笛は友達や周りの大人から教わってできるようなことが多いのではないだろうか。その意味で継承性という特徴を言語と共有している。ただ、特定の口笛の文化的継承が、言語のように何世代にも及ぶものなのかについては不明である。

では、泣き声や咳払いはどうだろうか？ 赤ちゃんは生まれてすぐに泣き声を上げる。親からその都度(エ)ウナガされたり教えられたりして泣くわけではない。したがって、赤ちゃんの泣き声は継承性の例とは言いがたい。その意味で非言語的である。一方、対人的に用いる咳払いは、Xであるため、継承性を有する。言語との共通点である。

オノマトペは継承・習得されるものである。まだ文を発話できない一語期の子どもも、イヌを指して「ワンワン」、車を指して「ブーブ」と言う。それは周りの親などが話す日本語のインプットを学習したがゆえの発話である。実際、周りの環境が英語であれば、イヌは *bowwow*、車は *vroom-vroom* や *zoom-zoom* と言うようになる。ほかに、「チュンチュン」が雀すずめの声、「そよそよ」が微風、「くよくよ」が悩み続ける様子を表すことは、日本語での生活の中で一つ一つ習得しなければならない。この点についても、オノマトペはいたって言語的である。

子どもは、親などのコミュニケーションを通して、母語の仕組みを学ばなければならない。これがホケットの言う「継承性」であった。一方、「習得可能性」とは、母語以外でも学ぶことができるという特徴である。たとえば多くの日本語話者は、英語やスペイン語を完全にはマスターできずとも、「スカイ sky」が空を指し、「セニョリータ *senorita*」が未婚女性への呼びかけで用いられることを学べている。

大人になってからでも学べるコミュニケーションの道具はほかにある。たとえば、日本人は欧米に留学すると、しばしば表情やジェスチャーおおげさが大袈裟になって帰ってくる。眉を大きく上げて喜んだり驚いたり、両腕をぶんぶん振って怒ったりといった具合である。

一方、人間はネコやイヌの鳴き声や、イルカが出すコミュニケーション音を習得することはできないものと思われる。それらの音真似おとまねはできても、実際に動物と「会話」できるわけではない。(c)、モンゴルには同時に高い声と低い声を出すホーミーという歌唱法があるが、これは人間の発声であるにもかかわらず、誰しも習得できるわけではない。つまり習得可能性が低い。

オノマトペを考えてみよう。外国語のオノマトペは、なかなか難しいが習得可能である。英語でカラスの鳴き声を「コー caw」、ドアを閉める音を「スラム slam」、電車のガタゴトを「ランブル rumble」と写すことを「存じの読者もいるだろう。南アフリカのズールー語では、何かをむしり取ることを「モニユ monyu」というオノマトペで表す。静かであることは「ニヤ nya」と言うらしい。日本語話者には少なからず違和感があるものの、ズールー語ではそうなのだと言われれば、覚えられないことはない。少なくともイルカのコミュニケーションやホーミーの歌唱をマスターするよりは、はるかに(オ)ヨウイヨウイであろう。この点においても、オノマトペは言語的である。

(今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』より)

〔注〕 ＊ホケット……アメリカ合衆国の言語学者・人類学者（Charles Francis Hockett：1916年～2000年）。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分の漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(配点 各2点)

(ア)	ガイトウ	①	骸	②	該	③	慨	④	涯	⑤	効
(イ)	ヒソむ	①	宣	②	薦	③	旋	④	潜	⑤	鮮
(ウ)	キジュン	①	順	②	准	③	準	④	循	⑤	純
(エ)	ウナガされ	①	則	②	測	③	捉	④	即	⑤	促
(オ)	ヨウイ	①	居	②	易	③	井	④	威	⑤	依

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

(配点 各2点)

- ① しかし
- ② なぜなら
- ③ つまり
- ④ さて
- ⑤ また

問三 空欄（甲）、（乙）に入るものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は（甲）

9

（乙）

10

（配点 各4点）

（甲）

① 懐疑的

② 擬似的

③ 戯画的

④ 理想的

⑤ 文学的

（乙）

① いかめしい

② いぶかしい

③ めざましい

④ おぞましい

⑤ わずらわしい

問四

空欄 X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

11

（配点 4点）

① 社会文化の中で覚える合図

② 日本社会の中で生きる方法

③ 対人関係の中で嫌われる皮肉

④ 親子関係の中で教わる反応

⑤ 伝統文化の中で使われる嘘うそ

問五

次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

12

（配点 5点）

「イヌ」という音形がつねに〈イヌ〉という概念と結びついていることとは対照的である。

① 《1》

② 《2》

③ 《3》

④ 《4》

⑤ 《5》

問六 傍線部A「口笛や咳払い」とあるが、その説明として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

(配点 5点)

- ① 口笛や咳払いが感動を示すときや他人の無作法を指摘するときなど、非常に限られた状況では特定の概念と結びつく。
- ② 口笛や咳払いは誰かが聞くことが想定されておらず、コミュニケーションが意図されていないため言語性を持たない。
- ③ 口笛や咳払いはイマ・ココでしか機能せず、超越性を持たないため、コミュニケーションの媒体としては機能しない。
- ④ 口笛や咳払いは日本語コミュニティの中で特定の意味と明確に結びついていないので、日本では常に意味性を持たない。
- ⑤ 口笛や咳払いは特定の伝統・文化の中で習得され、何世代にも及んで継承されてきたという点においては言語性が高い。

問七 傍線部B「オノマトペ」とあるが、その説明として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

(配点 6点)

- ① 日本語や英語、南米のケチュア語、南アフリカのズールー語のようにオノマトペが非常に豊富な言語もあれば、逆に、オノマトペがほとんど存在しない言語もある。
- ② オノマトペはコミュニケーション性の高いことばであり、母語での生活の中で親や周りの大人とのコミュニケーションを通じて一つ一つ習得しなければならない。
- ③ オノマトペには聞き手を場面に引き込む積極的なコミュニケーション機能が期待されることから、エピソードを語るときだけではなく、演説や演劇にも多用される。
- ④ オノマトペはイルカの出すコミュニケーション音などと比べると習得可能性が高いが、それだけでは会話が成立しない点において言語性が低いことは共通している。
- ⑤ 南アフリカのズールー語で使用されるオノマトペは、日本語話者には少なからず違和感があるものなので、日本語コミュニティの中ではオノマトペとは言えない。

問八 本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

(配点 6点)

- ① 音声言語であれ手話であれ、発話は相手に意図を伝えることを目的とされることから、言語における「特定性」とは、発信の目的がコミュニケーションに特化しているという性質を意味する。
- ② 名詞であればそれに対応する存在の概念と、形容詞であれば何らかの属性概念と結びつくように、言語における「意味性」とは、特定の音形が特定の意味に結びつくという性質を意味する。
- ③ 目の前の物事だけでなく、その場のないもの、過去や未来の出来事をも話題にできるように、言語における「超越性」とは、時空を超えて物事を語るることができるという性質を意味する。
- ④ 言語における「継承性」とは、「伝統的伝達」と同義で、母語を学ぶ際には特定の伝統・文化の中で単語や単語の組み合わせ方を教えられて習得しなければならないという性質を意味する。
- ⑤ 「習得可能性」とは表情やジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションにもあるもので、母語であればどのようなコミュニケーションも自由に行うことができるという性質を意味する。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

文化人類学は約150年前に欧米で生まれた学問です。この150年のあいだに^A文化人類学のあり方は大きく変わってきました。しかし、それでも文化人類学がどういう学問かをひとことというならば次のようにいえるでしょう。

文化人類学とは、人間の社会的存在としての特性について内在的・個別的・具体的に探究することで、人間がもつ文化の多様性を明らかにしつつ、人間としての共通性は何かを探究する学問である。

何やら抽象的な言葉が並んでいて、すつと頭に入ってこないかもしれません。でも、心配はいりません。この先を読んでいけば、※本章を読み終わったときには、この呪文のような言葉の意味が分かるはずですよ。

人類学は、英語ではアンソロポロジー (Anthropology) といいます。これは、「アンソロポス」と「ロゴス」という2つの単語の ですよ。アンソロポスとはギリシア語で「人間」を意味します。ロゴスは言語や論理という意味もありますが、「学問」という意味もあります。したがって、語源をたどると人類学とは「人間についての学」、すなわち人間についての研究となるわけです。

- a 文化人類学は考古学や社会学、地理学、哲学などの隣接分野と密接に関係しながら、とりわけ20世紀に入ってイギリスやフランス、アメリカにおいて発展してきました。
- b イギリスでは社会人類学、フランスでは民族学、アメリカでは文化人類学と異なる名称で呼ばれてきましたが、日本では文化人類学という名称が一般に流通しています。
- c 人類学はいわゆる理系と文系にまたがる学問です。
- d 前者は人類がどのように進化したのかといった起源や変遷について骨や遺伝子を用いて探究するのに対し、後者はこのような進化の観点を否定し、世界中の人間集団の文化的な多様性を等しく尊重しながら人間の特質を探究しています。
- e 生物種としてのヒトを自然科学の観点から研究する自然人類学(形質人類学)と、人類の文化を人文社会科学の観点から研究する文化人類学に分かれます。

本書ではこれら3か国で展開してきた分野を総称して「文化人類学」と表記しています。

なお、「文化人類学は社会学と似ていてどこが違うのか分からない」という意見をよくもらいます。確かに文化人類学と社会学は、どちらも私たちの常識を問い直すことを(ア)カカ^アけていたり、家族や宗教といった研究領域の重なりがみられたりします。しかし、これまでよくいわれてきた違いは、社会学は私たちの社会——いわゆる近代化した社会——を、文化人類学は「未開」の社会——つまり近代化していない社会——を対象にしてきたというものです。

(a)、この「近代／未開」という区分は現代のグローバル化する社会では(イ)フメイリヨウ^イなものになっています。これまで人類学が対象としてきた社会にも、貨幣経済の波が押し寄せ、科学技術が浸透したり、学校教育が普及したりして、見かけ上、私たちの社会とあまり変わらなくなってきました。また、文化人類学者のなかにもヨーロッパやアメリカ、あるいは都市社会を対象とする人たちも増えてきました。《1》

ただ、それでもやはりどこかB対象^Bに向き合う態度が、社会学者と異なるところが多々あります。あくまで一般的な傾向ですが、文化人類学者は自分たちとは異なる生き方^カをしている人たちの生活のなかに入り込み、異なる文化を理解しようとしつつ、同時に人間としての共通性に目を向けようとしていきます。

こういった傾向をもつ理由は、「文化人類学が探究する大きな問い」と、「その問いに迫るための方法」が、一見似たような対象を扱っているように見える社会学とは異なるからです。次に、この大きな問いと方法について見ていきましょう。《2》

それぞれの学問分野には、必ず分野ごとに独自の問いがあります。経済学であれば「人間の経済行動の一般的法則の発見」、心理学であれば「人間の心理の特徴の解明」だったりします。(b)、文化人類学は何を探究しようとしているのでしょうか。

第一に、文化人類学は「人間の文化がどれほど多様なのか」を問います。たとえば、*この章の冒頭に記したようにイヌ肉を食べる人たちもいれば、発酵させた大豆を「納豆」と呼んで食べる人たちもいます。イヌ肉を食べる人を見て「うわっ」と思う人もいれば、強烈な臭いでネバネバ糸を引いた大豆を食べる姿を見て「うわっ」と思う人たちもいます。それほど人間の食べるものは多様であり、そこに食文化の多様性を見いだすことができます。

食文化だけではありません。*これまで見てきたように、この広い世界には血縁を重視しない家族関係があったり、何か不幸があったときの原因を妖術の仕事だと解釈したり、一度埋葬した死体をしばらくして掘り起こして2度目の葬式を行うのが正しい死者との向き合い方だと考えたりする社会があります。このように世界にはじつに多様な文化があります。人類学が目指すのは、このような多様な文化に関心をもち、その文化を生きる人たちの考え方を理解していくことなのです。《3》

しかし、文化人類学は文化の多様性を理解していくことだけを追求しているわけではありません。第二に、文化人類学は多様性をふまえたうえで見いだせる「人間としての共通性」について探究します。血縁を重視しない家族があったとしても、家族と呼べるような関係性は人間の社会に普遍的にみられるのかどうか、あるいは葬式の仕方がさまざまあるけれども、こうした儀礼のなかにある程度共通するプロセスはあるのか、といった問いを探究してきました。

とりわけ重要なのは、いったん私たちの常識を取り払ったうえで、人間としての共通性を探究していくところにあります。※これまで話してきた通り、人間が組織をつくるときに優先する原理には場と資格の2つがあるとか、呪術と科学に共通する人間の思考の型があるとか、意外なところに共通性を見いだしていくところが人類学の魅力だといえます。こうして見ていくと、人間社会には多様性はあるけれども、お互いが分かり合えないほど分断されているわけではなく、どこかに共通性を見いだせる可能性があるということが分かってきます。《4》

第三に、文化人類学は「文化的な多様性がどのように変化していくのか」を探究します。本章の冒頭で犬食文化について言及しました。現代の日本ではイヌ肉を食べる習慣はありませんが、以前は違いました。少なくとも弥生時代の人びとはイヌを食用にしていたようです。伊勢津藩の藩主である藤堂高虎が1608年に出した「二十一条の法度」には、「犬食の禁止」が含まれていることから、Yが分かります。今では(ウ)スタれていますが、これはさまざまな政治的・経済的な影響により、文化が変化してきたことを示しています。

言語も文化のひとつですが、現代の私たちは専門的な教育を受けない限り、平安時代や江戸時代に書かれた日本語の文章を読んでも直感的に理解できません。日本語に限らず、あらゆる言語は時間をかけて少しずつ変化していきます。言語ばかりでなく、さまざまな文化が時間をかけて変化していきます。文化人類学は、文化の変化がいかなる背景のなかで生じるのかを明らかにしていく研究をしています。《5》

ここに挙げた3つの問いは、あくまで文化人類学の探究についての一般的な方向性ですので、すべての研究の問いがこの3つに収れんするわけではありません。とはいえ個別の研究テーマはそれぞれですが、文化人類学が向かっていく大きな方向性が、文化の多様性・共通性・変化の探究であるといっても差し支えないでしょう。

(箕曲在弘『自分のあたりまえを切り崩す文化人類学入門』より)

〔注〕 ※本章を読み終わったとき／この章の冒頭に記した……引用部は第9話(第9章に相当する)で、その冒頭に犬食の習慣が紹介されている。

※これまで見てきたように／これまで話してきた通り……引用部よりも前の部分を指す。

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

16、

(イ)

17、

(ウ)

18

(配点 各2点)

(ア) カカ|げて

- ① 裁判でケイ|ソウ中の事案だ。
- ② 水筒をケイ|タイする。
- ③ 毎日厳しいケイ|イコに励む。
- ④ 祝日に国旗をケイ|ヨウする。
- ⑤ 自己ケイ|ハツに努める。

(イ) フメイ|リヨウ

- ① リヨウ|キ的な事件に恐怖する。
- ② カン|リヨウ組織の弊害を語る。
- ③ 会員から会費をジュ|リヨウする。
- ④ リヨウ|ゼンたる事実を突きつける。
- ⑤ 自宅でリヨウ|ヨウする。

(ウ) スタ|れて

- ① ハイ|タ的な規制を緩和する。
- ② 審議未了でハイ|アンとなる。
- ③ 三回戦でハイ|ボクする。
- ④ ハイ|スイの陣の覚悟で臨む。
- ⑤ 演劇部が逸材をハイ|シユツする。

問二 本文中の（ a ）（ b ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ） 、（ b ）

（配点 各2点）

- ① というのは ② よって ③ では ④ あるいは ⑤ とはいえ

問三 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 完成語 ② 合成語 ③ 多義語 ④ 重言 ⑤ 畳語

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 4点）

- ① 当時の人もイヌを食べていたこと ② 当時はイヌを食べることが珍しかったこと ③ このころ初めて犬食が禁止されたこと
④ 西洋からの文化の流入があったこと ⑤ 犬食文化が野蛮なものであったこと

問五 次の一文は、本文中の《1》～《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

（配点 5点）

こういった状況を考えると、文化人類学と社会学の違いはあいまいになってきています。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問六 本文 の中の a ～ e の各文を意味が通るように並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

(配点 5点)

- ① a | b | d | e | c
- ② b | c | e | d | a
- ③ b | c | d | a | e
- ④ c | a | d | e | b
- ⑤ c | e | d | a | b

問七 傍線部 A 「文化人類学のあり方は大きく変わってきました」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

号は

(配点 5点)

- ① 人間の社会的存在としての特性について内在的・個別的・具体的に探究することであるという文化人類学の定義が変更を迫られてきた。
- ② 常識が問い直されたり家族や宗教などの研究領域の重なりがみられたりするようになって、文化人類学と社会学との違いがあいまいになった。
- ③ 文化人類学は近代化していない社会を対象にしてきたが、近代化した社会を対象としてきた社会学が文化人類学の領域に入りこんできた。
- ④ 文化人類学が対象としてきた近代化していない社会に貨幣経済の波が押し寄せ、科学技術が浸透したり学校教育が普及したりしてきた。
- ⑤ 文化人類学者のなかにヨーロッパやアメリカ、あるいは都市社会を対象とする研究者が増えたことで、文化人類学の研究が減ってきた。

問八 傍線部B「対象に向き合う態度」とあるが、これに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

26
(配点 5点)

- ① 自分たちとは異なる生き方をしている人たちの生活に入り込みながら、自分の中の常識にとらわれないことが必要である。
- ② 自分たちとは異なる生き方をしている人たちや異なる文化を、あくまでも「異なるもの」だと見る客観性が必要である。
- ③ 自分たちとは異なる文化の中にある人間としての共通性に目を向けながら、その文化の正当性を考えることが必要である。
- ④ 自分たちとは異なる生き方をしている人たちの思考の型を明らかにするための心理学的な視点が必要である。
- ⑤ 自分たちとは異なる文化がどのように発生したのかを考えるための政治学的・経済学的な知見が必要である。

問九 傍線部C「3つの問い」とあるが、「問い」を探究することの意義の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

27

(配点 6点)

- ① 「人間の文化がどれほど多様なのか」という問いを探究することで、世界の多様な食文化について知り、自国の食文化を世界に広めるためにはどうすれば良いかを考えることができる。
- ② 「人間の文化がどれほど多様なのか」という問いを探究することは、世界の多様な文化について正確に理解し、他国や他地域の文化の長所を自国の文化に取り入れることを目的とする。
- ③ 「人間としての共通性」は何かという問いを探究することで、人間が組織をつくるときに優先する原理が明らかになり、近代化していない社会の組織を近代化することが可能になる。
- ④ 「人間としての共通性」は何かという問いを探究することで、世界の文化の多様性を前提としながらも、人間社会はお互いが分かり合えないほど分断されているわけではないことを明らかにできる。
- ⑤ 「文化的な多様性がどのように変化していくのか」という問いを探究することで、生物種としてのヒトを自然科学の観点から研究する自然人類学と文化人類学との融合を進められる。

問十 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は

28

(配点 6点)

- ① イヌ肉を食べる人を見て「うわっ」と思ったり、強烈な臭いでネバネバ糸を引いた大豆を食べている姿を見て「うわっ」と思ったりするとき思わず生じる驚きは、多様な文化に触れたという意味で文化人類学研究の契機となる。
- ② 不幸があったときの原因を妖術の仕業だと解釈することや、呪術が存在すると考える文化が存在することを非科学的だと一方的に判断せず、あくまでも科学的な視点でその現象を研究するのが文化人類学の方法である。
- ③ 一度埋葬した死体を掘り起こして2度目の葬式を行うのが正しい死者との向き合い方だと考える社会は、一見すると異質なものに見えるが、その中にも共通するプロセスがないかと探る視点が文化人類学には必要である。
- ④ 人類学は理系と文系にまたがる学問で、さらに文化人類学は考古学や社会学、地理学、哲学などの隣接分野と密接に関係する学問であるからこそ、呪術と科学に共通する人間の思考の型があるという共通性を見いだせる。
- ⑤ 現代の日本にイヌ肉を食べる習慣がないだけで、日本でも弥生時代の人びとはイヌを食用にしていたことや、現在もイヌ肉を食べている人たちがいることから、イヌ食は人類にとって普遍的な食文化であるといえる。

国語 (実施日 2月17日) 【解答】

受験校	受験番号	フリガナ
		氏名

/ 100

第1問 (配点50点)

	問一				
	1	2	3	4	5
解答	②	④	③	⑤	②
配点	2	2	2	2	2

	問二			問三	
	6	7	8	9	10
解答	①	③	⑤	②	④
配点	2	2	2	4	4

	問四	問五	問六	問七	問八
	11	12	13	14	15
解答	①	③	①	②	⑤
配点	4	5	5	6	6

第2問 (配点50点)

	問一			問二	
	16	17	18	19	20
解答	④	④	②	⑤	③
配点	2	2	2	2	2

	問三	問四	問五	問六	問七
	21	22	23	24	25
解答	②	①	①	⑤	④
配点	4	4	5	5	5

	問八	問九	問十
	26	27	28
解答	①	④	③
配点	5	6	6